

学 位 論 文 題 名

牛乳流通の広域化と市場編成に関する研究

学位論文内容の要旨

本論文は、5章からなり、図表70、引用・参考文献86を含む167頁の和文論文で、別に参考論文16篇が添えられている。

日本の酪農地域は、生産過剰の下で激しい産地間競争と低い乳価とを強いられている。また牛乳流通は現在、全国の酪農地域と全国の消費地域の間で広域的に展開されている。本研究は、この点に注目し、従来十分に研究されていなかった牛乳市場の変動について、全国的に広域化しつつある流通実態の詳細な実証的検討を行って、市場編成の実態とその特徴を明らかにしようとしたものである。

第1章では研究の課題と従来の研究動向を概観し、本研究の方法と論文構成を概説した。

第2章では、統計資料を用いて、戦後の牛乳市場・流通の変化を3つの時期に区分し、その特徴を以下のように整理した。

- ①1966年に不足払い制度が実施される前の時期は、大規模乳業が全国的工場配置網を完成させるとともに、生乳生産段階でも生産者を系列組合で組織し、また牛乳小売段階でも系列の牛乳専売店を組織して、牛乳市場を管理していた。
- ②1966年以降は不足払い制度が実施され、生産者が販売先を自由に選択できるようになったことや、紙容器への転換、専売店流通から量販店流通への転換などの牛乳流通の革新によって、生産者団体である指定団体が市乳化率を高めるための産地間競争を激しく行うようになり、牛乳流通が広域化するに至った。
- ③1979年以降は、生乳の生産過剰が顕著になり、計画生産が行われた。この時期の産地間競争は、生産過剰が前提となっていたため生産に有利に働かず、牛乳流通における量販店の影響力と工場配置網を再編成した大規模乳業の影響力とが強まった。

第3章では、こうした牛乳流通の変化に対応して牛乳市場を構成する3つの流通主体、指定団体と乳業、牛乳小売業の動向について独自に発掘した調査資料を詳細に分析し、以下のことを実証した。

①指定団体は不足払い制度以降、高い手取り乳価を獲得するため市乳向け生乳販売を行い、産地間競争は市乳化率をめぐって激しくなった。これは販売先をめぐる競争であり、最終的な消費である牛乳小売市場をめぐる乳業間の販売競争を誘発していった。とくに計画生産が実施されると乳価が低く抑えられたままの産地間競争となり、より市乳化率の高い乳業、安定した販路を持つ量販店と取引のある乳業への取引を強めていくこととなった。

②乳業の動向については、1970年代以降の牛乳流通の技術革新や流通経路の変化によって、系列の牛乳専売店方式によって行われていた牛乳小売流通が量販店中心の流通に変わっていった。このため、大規模乳業によって占有されていた大消費市場が開放され、中小乳業や農協系が市場参入して激しい乳業競争がくりひろげられた。生産過剰や季節別生産量の一層の不安定化によって、乳業も需給調整を迫られるが、加工処理機能を持たない中小乳業や農協乳業は対応が不十分になる。他方、大規模乳業は全国的工場配置網を活用して独自の需給調整を行うことができるため、乳業の中で相対的に優位となった。

③量販店の動向としては、牛乳を集客商品として活用するため、低価格販売や特売を恒常的にを行い、牛乳流通に小売価格の低位固定化をもたらした。また、量販店は安定した販売量やチェーン店機能を持っているため、乳業も乳業間競争の下ではPBという形で量販店と契約取引を行わざるを得ず、牛乳流通における量販店の影響力の拡大と牛乳価格の低位固定化が一層進んだ。さらに、量販店の発注量は、特売を月に何度も設定するため不安定なものになり、これが乳業の生産計画や生乳生産の計画をも変動させることになった。

第4章では、牛乳市場を構成する流通主体の動向から、市場編成の実態と特徴を解明、考察し、以下の点を明らかにした。

①牛乳の物流と商流における各流通主体間の取り引き関係の変化である。物流の面では技術革新によって末端の小売段階から加工処理段階を経て生産段階に至るまでが短時間で結合し、注水量に応じて生産量が変動する特徴をもった。また商流の面では特定の小売店と特定の加工処理業、さらに特定の指定団体とが結合し、小売業の注水量や用途に応じた量や乳質の生産が強いられるようになった。この結果、日別、季節別の消費量の変動が乳業や生産者の生産のあり方に直接影響を与え、牛乳の計画的な生産が困難になっている。とくに生乳取引において計画生産に不可欠な定時定量や定時定率の取引形態が減少し、必要時必要量取引が増加した。

②乳価の低位固定化と乳価の地域格差の形成である。現在の流通の仕組みが小売段階である量販店主導に編成されてきたために、乳価が低く固定されている。また、生乳の用途が多様化

しているため生乳の価格が多様に設定され、このことがプール乳価を一層引き下げる役割を果たしている。とくに「その他向け乳価」の設定は、飲用向け乳価と加工原料向け乳価格とを連動させることになり、一層の価格引き下げの条件を拡大した。さらには、乳価の地域格差が計画生産実施以降では、産地間競争によって縮小しなくなり、固定化されはじめた。

③産地間競争の激化である。産地間競争は不足払い制度以降、加工原料乳地帯のプール乳価を上昇させ、乳価の地域格差を縮小してきた。しかし、生産過剰と流通構造での変化が進むと産地間競争があっても乳価の地域格差が固定化されるようになった。こうした中で、一層の乳価上昇を目指して格差のある産地から、広域流通を伴う産地間競争を再び活発化する傾向が生じてきた。

第5章では、以上で明らかにした牛乳流通の変化と、市場を構成する3つの流通主体の詳細な動向と相互関係と、その結果生じた牛乳の市場編成の実態と特徴を総括した上で、広域流通の下での牛乳流通の課題を提起した。

本研究で解明した最大の焦点は、牛乳の生産者と乳業、小売業が乳業を中心にして編成された市場構造から、小売業を頂点にして縦に系列的に編成される市場構造へと再編成されたことと、なおかつ、再編成された市場構造が生産者乳価格を引き下げる仕組みを持つことを実証したことである。したがって、牛乳流通の課題が、消費量の変動が直接的に生産量に影響しない市場構造を各流通主体間の協力によって育成することと、生産者団体による広域的な需給調整、組織的な流通管理体制の確立にあると結論づけた。

学位論文審査の要旨

主査	教授	臼井	晋
副査	教授	七戸	長生
副査	教授	太田原	高昭
副査	助教授	三島	徳三

本論文は、5章からなり、図表70、引用・参考文献86を含む167頁の和文論文で、別に参考論文16篇が添えられている。

今日の牛乳流通は著しく広域化し、酪農地域は、生産過剰の下で激しい産地間競争と低乳価と

を強いられている。本研究は、この点に注目し、牛乳市場の変動について、広域的な流通実態の詳細な検討を行って、市場編成の実態とその特徴を明らかにしようとしたものである。

第1章では、研究の課題と従来の研究動向を概観し、本研究の方法と論文構成を概説した。

第2章では、統計資料を用いて、戦後の牛乳市場・流通の変化を3つの時期に区分し、その特徴を次のように整理した。①1966年に不足払い制度が実施される前の時期は大規模乳業が全国的工場配置網を完成させ、市場を管理していた。②1966年以降は不足払い制度が実施され、生産者の販路選択が自由になったことや、紙容器への転換、流通経路の転換などの牛乳流通の革新によって、産地間競争が激しくなり牛乳流通が広域化した。③1979年以降は、生乳の生産過剰に伴って計画生産が行われ、牛乳流通の上で、量販店と、工場配置網を再編成した大規模乳業の影響力が強まった。

第3章では、牛乳流通の変化に対応して、牛乳市場を構成する3つの流通主体、生産者団体である指定団体と、乳業、牛乳小売業の動向について詳細な実態分析を行い、次の点を明らかにした。①指定団体は不足払い制度以降、高い乳価を獲得するため広域的な市乳向け生乳販売を行い、産地間競争は市乳化率をめぐる激しくなり、最終的な消費である小売市場をめぐる乳業間の販売競争を誘発していった。②乳業では、1970年代以降の牛乳流通の革新によって、大規模乳業に占有されていた大消費市場が開放され、中小乳業や農協系乳業が市場参入して激しい乳業間競争が進んだ。③量販店では、牛乳を集客商品として活用するため、低価格販売や特売を恒常的にを行い、小売価格の低位固定化をもたらした。また、量販店は安定した販売量やチェーン店機能を持つため、各乳業もPBという形で量販店と契約取引を行わざるを得ず、量販店の影響力が一層進んだ。

第4章では、流通主体の動向から生み出される市場編成の実態と特徴を解明し、考察を加えた。①物流の面では技術革新によって末端の小売段階から生産段階までが短縮され、商流の面でも特定の小売店と特定の加工処理業、さらに特定の指定団体とが系列的に結合し、消費量の変動が生産量に直接的に影響を与え、牛乳の計画的な生産を困難にしていることを明らかにした。②現在の流通の仕組みが小売段階である量販店主導に編成されたために、乳価が低位固定されていること、さらに乳価の地域格差も計画生産以降では固定化されたことを明らかにした。③流通構造の変化で乳価の地域格差が固定化されると、一層の乳価上昇を目指して格差のある産地から、広域流通を伴う産地間競争が再び活発化することを明らかにした。

第5章では、各章の分析結果を総括し、現在の牛乳流通の課題を提起した。すなわち、本研究で解明した焦点は、牛乳の生産者と乳業、小売業が乳業を中心にして編成された市場構造から、

小売業を頂点にして縦に系列的に編成される市場構造へと再編成されたことと、そして、再編成された市場構造が生産者乳価を引き下げる仕組みを持つことを実証したことである。したがって、牛乳流通の課題は、消費量の変動が直接的に生産量に影響しない市場構造を各流通主体間の協力によって育成することと、生産者団体による広域的な需給調整、組織的な流通管理体制の確立にあると結論づけた。

以上のように、本研究では、牛乳流通の広域化の実態について、独自の資料発掘によって詳細な解明を行い、また、流通主体の取引関係の検討によって、これまで十分に明らかにされていなかった牛乳市場の編成に関する独創的新知見を提起した。この点で学術的に高く評価されるとともに、酪農振興を図る上でも、貴重な示唆を与えている。

よって審査員一同は、別に行った学力確認試験の結果と合わせて、本論文の提出者小金澤孝昭は、博士（農学）の学位を受けるのに十分な資格があるものと認定した。